

2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	幼児の運動能力向上に関する研究 － 幼児期運動指針の認知度に着目して－
キーワード	①幼児期運動指針、②幼児の運動能力、③運動遊び

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	キド サチコ 城戸 佐智子
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	宮崎国際大学 教育学部 講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	宮崎国際大学 教育学部 講師
プロフィール	中村学園大学家政学部児童教育学科を卒業後、小学校教員等を経て、2010年4月より東九州短期大学幼児教育学科に助教として9年間勤務した。その間、2015年3月に中村学園大学大学院人間発達学研究科修士課程を修了した(人間発達学修士)。2019年4月より宮崎国際大学教育学部に講師として着任。同大学に講師として勤務する傍ら、2022年4月より宮崎大学大学院農学工学総合研究科博士後期課程に入学。現在、筋電計、加速度センサー、足趾握力測定器等を使用し、幼児の遊び時の体の動きや運動量、足趾握力などを測定して、幼児の子どもロコモについて研究している。

1. 研究の概要

子どもの運動能力を向上させるためには、幼児期に活動を通して様々な動きを獲得することが必須となる。平成24年に文部科学省が策定した「幼児期運動指針」について、平成27年までは幼児期運動指針についての質問紙調査などの実績が残っているが、ここ数年はそのような調査は実施されていない。幼児期運動指針が通達されて2～3年ほどでの調査だったが、あまり内容が把握されていないという結果が多かった。10年経過した現在において、どのくらいの現場が認知しているのか調査することは、今後の幼児の運動能力向上に向けて教育・保育施設が取り組むべき課題を見出せると考える。本研究では、保育現場でどのくらい幼児期運動指針が認識され取り入れられているのか、またそれぞれの園での運動遊びの状況を把握するため、宮崎県認定こども園協会の協力のもと、アンケート調査を実施した。それと並行して、幼児の運動能力等の測定方法について、実際に使用する機器を用いて検討した。

2. 研究の動機、目的

子どもの体力・運動能力の低下が叫ばれて久しい。科学技術の飛躍的な発展などにより、生活が豊かで便利になる一方、子どもにとっては、体を動かす機会が減少している。また、近年では新型コロナウイルスの影響により、屋外で体を動かす機会を失っており、今までゲームをしなかった子どもまでもが屋内でゲームをするようになるという現状が発生したことで、ゲーム依存傾向の子どもが増加していることが問題視されている。今後、子どもの運動能力の低下がさらに進むと考えられる。

文部科学省は、平成24年に「運動習慣の基盤づくりを通して、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や社会性、創造性などを

育むことを目指す」として、「幼児期運動指針」を策定し、全国すべて（約 35,000）の保育所・幼稚園に通達した。文部科学省は、幼児期運動指針の中で「幼児が楽しく体を動かして遊んでいる中で、多様な動きを身につけていくことができるように、様々な遊びが体験できるような手立ても必要」としている。そのためにも、保育者をはじめとした幼児に関わる人々の幼児期の運動に対する理解が重要となる。

そこで本研究では、宮崎県の幼児の運動能力向上を目指し、宮崎県の教育・保育施設における「幼児期運動指針」の認知度及び幼児の運動能力向上に対する取り組みの実態把握と意識について明らかにすることを目的とした。また、幼児の運動能力や運動量、巧みな体の動きに係ると考える足趾握力の計測等について、妥当な測定方法を検討した。

3. 研究の結果

【方法】

宮崎県認定こども園協会の協力を得て、同協会加盟園（80 園）の園長、3 歳～5 歳児のクラス担任を対象に、幼児期運動指針及び園での運動遊びの状況に関する Web アンケート調査（Google Form を使用）を実施した。園長 16 名、クラス担任 13 名の回答を得た。

運動能力や運動量、足趾握力等の測定方法に関して、先行研究から得た測定方法を参考にし、大学生を対象に実際に測定や観察に使用する機器を用いて測定・観察を行なった。

【結果】

《幼児期運動指針について》

幼児期運動指針の認知度に関する回答結果は、園長、クラス担任ともに「存在を知っており、内容も大体知っている」と回答した割合は少なかった（図1）。クラス担任においては、「存在を知らない」と回答した割合が61.5%であった。このことから、国の政策がクラス担任に認知されていないことが示唆された。園長においても、内容が分からない割合が9割を超え、幼児期運動指針が保育の現場ではあまり認知されていないことが示された。

促進用パンフレットの認知度に関しては、園長は56.2%が「見たことがある」と回答したが、「内容までは見ていない」「見たことがない」と87.9%が回答した（図2）。クラス担任においては、69.2%が「見たことがない」と回答し、内容まで把握している割合は、15.4%に留まった。

幼児期運動指針を知った経緯について、「幼児期運動指針を知っている」と回答した者にどのように知ったか回答を求めた。園長においては、「促進用パンフレット、ガイドブック、DVD」が42.8%と一番多く、続いて「文科省の通達」で28.6%であった。クラス担任においては、「促進用パンフレット、ガイドブック、DVD」と回答した割合が80.0%と大きく占めた。しかし、これは幼児期運動指針の存在を知っている割合が少ないため、回答が偏っていることが考えられる。

《運動状況について》

園での運動状況では、毎日の外遊び時間について尋ねたところ、園長、クラス担任ともに「2時間以上」が5割以上を占めた（図3）。次いで「1時間～2時間未満」であり、毎日の外遊びを1時間以上している園がほとんどであった。

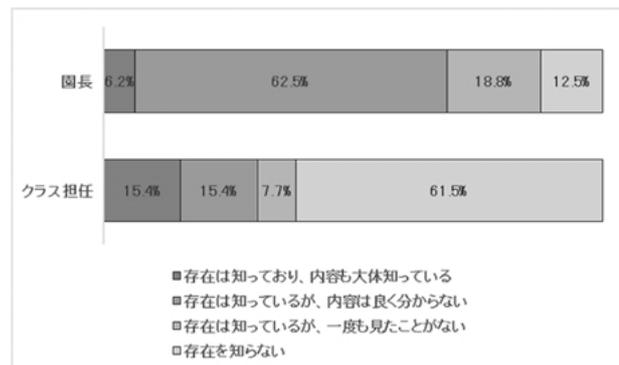


図 1. 幼児期運動指針の認知度

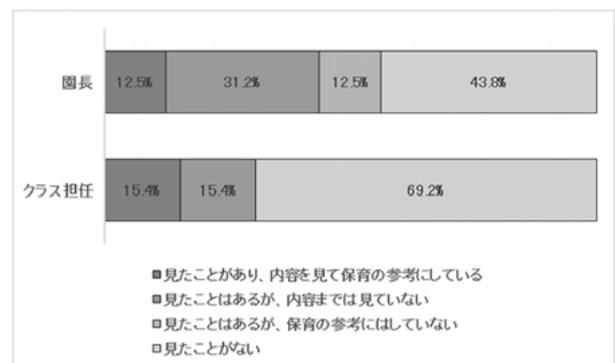


図 2. 促進用パンフレットの認知度

クラス担任に、運動遊びをする際に幼児に対して意識していることについて尋ねたところ、「体を動かす楽しさを味わう実感」が一番多く、次いで「ルール、決まりを守る重要性」「仲間との協力や競争」という回答が多かった。また、幼児の運動について課題として感じることについては、「いろいろな動きを経験していない」が多く、経験不足を危惧している現状があることが分かった。

幼児の体力低下や動きの未獲得を感じる場面があるかという質問に対して、「多々ある」「少しある」と感じている割合は、園長が50.0%、クラス担任が69.2%という結果であり、よりクラス担任が子どもの体力低下や動きの未獲得に関して危機感を持っていることが示された(図4)。具体的な場面として、「転んだ時に手につけない」「ケガが多くなった」「うんていや上り棒ができない」「片足立ちができない」などが多く上がった。

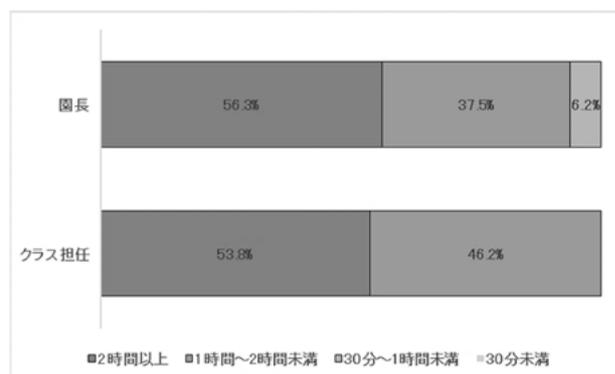


図3. 保育時間での外遊び時間

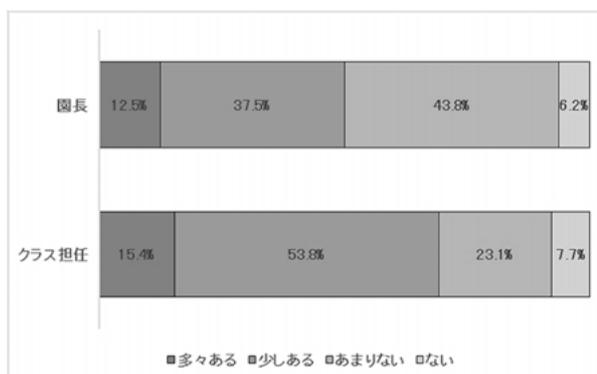


図4. 体力低下や動きの未獲得を感じる場面があるか

《まとめ》

- ・幼児期運動指針の認知度は高くなく、クラス担任においては知らない者が多い。
- ・外遊び時間はいずれの園も一時間以上しており、幼児期運動指針が目指す「毎日楽しく60分以上体を動かす」ということが自然とできている。
- ・幼児の体力低下や動きの未獲得について危機感を感じている保育関係者は多く、特にケガなどの危険を避けることができない子どもが多い。
- ・スマートウォッチの使用については、使い始めは数値が安定しない傾向にあり、装着する人にある程度慣れさせてから測定する必要があると考える。
- ・足指筋力測定器は、測定姿勢、膝の角度、測定する時間帯、スポーツ歴などが結果に影響すると考えられる。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の調査で、子どもの体力低下や動きの未獲得に危機感を持っている保育関係者が多いことが分かった。今後、実際に幼児の運動能力テストや運動器検診、筋電計や加速度センサーなどを用いた運動量の測定や動きの分析、足趾握力測定などを実施し、幼児の運動機能や運動能力についての身体的課題を追究したい。また、小学生の子どもロコモについては少しずつ研究が進んでいるが、幼児の子どもロコモについてはまだ研究事例が少ないため、様々な測定データから体力低下の要因を調べていきたい。その結果から、幼児期運動指針の内容を基にした運動プログラムを考案、実践しながら、本研究が幼児の運動能力向上に繋がることを期待している。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

今回、アンケート調査を行ったことで、回答数は多くはなかったものの、幼児期運動指針の存在を保育現場に知らせるきっかけとなったのではないかと思います。実際に、幼児期運動指針のガイドブックを取り寄せた園もあったと報告を受けました。また、保育現場での運動状況や運動に対する課題も知ることができ、今後の研究に繋がるデータを集めることができました。現在、前年度から引き続き器具を使って、新たなデータを取っているところです。子ども

の運動能力・体力低下は長年懸念されている事柄であり、特に近年は新型コロナウイルス感染が流行し、さらに低下が危惧されています。そのような中で、自身の研究が少しでも子どもの運動能力・体力向上に繋がることを願っています。

本研究を遂行するにあたりご支援いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。